

## 博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	上田洋子
論文題目	シギズムンド・クルジジャンフスキイ研究
<p>審査要旨</p> <p>提出者（上田洋子）の学位請求論文「シギズムンド・クルジジャンフスキイ研究」は全5章、及び序章・終章からなり、ソヴィエト時代には不遇なままに忘れられ、ペレストロイカ期に再発見されたロシアの作家シギズムンド・クルジジャンフスキイ（1887 - 1950）に関する我が国で最初の本格的な研究であり、多岐にわたるこの作家の創作を緻密に読解し、その特質と意義を論じたものである。厳しい査読制をとる日本ロシア文学会誌や、北海道大学の「スラヴ研究」誌に掲載された論文をはじめ、論集や紀要等に掲載された諸論文を基礎として、枚数制限のある学会誌や紀要等に掲載しきれなかった多くの論考を新たに加え、深化させて、クルジジャンフスキイの創作の主要なテーマと基本的な構造を浮かび上がらせるように配慮されている。</p> <p>クルジジャンフスキイ研究の先駆的な著作としては、ウラジーミル・トポロフによる「シギズムンド・クルジジャンフスキイの《負》空間」(1992)がある。これはこの作家の作品の特殊な空間の分析を通して、文学的価値を高く評価したものである。アンナ・シニツカヤの論文「時空間としてのメタファー（シギズムンド・クルジジャンフスキイの詩学の問題に向けて）」(2003)は、作品の主演としての言葉、虚構と現実の交錯、言葉のイメージによる意味内容の転位など、クルジジャンフスキイの言語的特徴を明らかにしており、本論文の論点と近いところにある。このほかにロシア革命後の4人の作家たち、ワギノフ、ドビチン、ハルムス、クルジジャンフスキイを論じたダリヤ・モスコフスカヤの論文「言葉の模索の中で 20 - 30 年代の《奇妙な》散文」(1999)などがあり、2007年にはカナダ、トロント大学の研究誌にクルジジャンフスキイ特集が編まれた。こうした、ロシア本国、また欧米の研究と同時並行的に、かつての公式的な文学史とは異なる視点から、この時代の文学の研究が進められている点に、本論文の大きな特色があると評価してよいだろう。</p> <p>本論文の序章では上記のような研究史が確認される。本論文はこれら先行研究を踏まえた上で、それらを批判的に自らの論考に取り入れていく。</p> <p>「第一章 『天才児向け童話集』(1918 - 1922)における言葉とテキストの問題」では初期の作品集から4つの短篇を選び、クルジジャンフスキイの創作の中心テーマとしての《存在》の問題を指摘し、言葉とテキストがいかにこのテーマと強く、深く結びついているかを精緻に分析している。たとえば文字列が実在の哲学者の対話の相手となる有様や、「歴史の一ページがめくられる」との決まり文句のままにページのようにめくられる地表面など、言葉とテキストが《存在》のテーマを負っているという、この作家の全過程に通じる問題の萌芽が、既に初期作品において見られることを分析している点で、特に意義のある章となっている。</p> <p>「第二章 世界認識の手段としての演劇 「演劇に関する哲学素」(1923)論」では、世界認識の手段としては哲学よりも演劇のほうがふさわしい、とのクルジジャンフスキイ独自の論の分析がなされる。ロシア語では同語根から派生する三項、すなわち不可視の《 本質的存在》に何らかの物質性を与えて表象し、人間にとって認識可能なものとするのが《 日常/物質的存在》であり、これを演じ、表象することで、より明確に理解させるのが《 仮想・虚構的存在》であるとされ、人間に認識不可能な《存在》の本質を少しでも捉えようとするなら、複数の言葉やモデルを用い、さまざまな角度から「演出」して表象・上演するしかない、と主張されることを指摘している。クルジジャンフスキイ理解にとって極めて重要な、この三項からなるモデルに着目したのは本論文が世界で最初であり、本論文の大きな成果であるといえよう。</p>	

氏名 上田 洋子

「第三章 モスクワ・ルポルタージュにおける《ブイト》と《イメージ》の詩学の形成 『モスクワの看板』(1924)を中心に」では、クルジジャノフスキイによって書かれたルポルタージュ『モスクワの看板』に着目し、この作品が《日常(ブイト)》をいかに捉えているのか、またそれをいかに文学へ取り込んでいるのかを分析する。看板という《日常》が都市の日常を反映することから、経済体制の変化により不要となった看板が、有用性からはまったく解放され、純粋な表象の機能を体現している、とクルジジャノフスキイは考えており、本論文では、こうした事象を集め、言葉で再現するクルジジャノフスキイの行為そのものが《日常/物質的存在》の表象をさらに表象し、《仮想・虚構の存在》にする芸術家の行為であることが指摘される。

「第四章 『瞳孔の中』(1927)における恋愛のテーマと忘却 語りと視覚の観点から」で扱われているのは、目を舞台に、目に映った表象を主人公とする作品における視覚と語りの問題である。恋愛中の男性と恋人の瞳孔の中に現れる複数の「瞳孔の小人」たちとの語りによって物語は作られ、やがて終幕に自分の物語を語り終えた小人は、今度は主人公の瞳孔の中に入る。そして本来の語り手である主人公が現れ、読者に問いをかけて終わる。ここではテキストが作家と読者の出会いの空間であると指摘され、この点で、テキスト内に描かれた空間のみを分析したトポロフの空間論に重要な修正が加えられる。

「第五章 『栞』(1927)における結実しないテーマ」では『栞』のテーマが文学そのものであり、文学論を取り混ぜつつ語られる即興の物語は、創作のさまざまな段階を意図的に露出するものとなっているという指摘がなされる。また作者自身も自作の読者となり、作品を何度も読み返している点に注目し、作品が舞台上の戯曲と同様に、一回性の生を永遠に生き続ける可能性を得ている、と指摘される。

「終章」では《本質的存在》《日常/物質的存在》《仮想・虚構の存在》という訳語を付された概念を再考し、これら《存在》の三様態からなるモデルがクルジジャノフスキイの作品のテーマを理解するための鍵になることが確認される。「存在とは何か」といった哲学的テーマが文学のテキストとして視覚的に表現され、また演劇的なものが文学作品に導入されていることが指摘される。

体制側のイデオロギー統制の進むなか、1920年代から30年代の非体制の表現者は、アヴァンギャルド文学の成果を踏まえながら、これに批判的な視点を持って「第二の散文」を生み出していった。日本の学会の研究テーマでも、近年、この時代を対象とするものが多くなってきている。本論文はこの特殊な時代にロシア文学が主題としていた課題を的確に指摘していると言えるだろう。

なかでもクルジジャノフスキイは、ハルムスなどと並んで重要な作家であり、本論文は彼のテキストを精読することによって、この時代の文学表現のありように光を当てて浮かび上がらせた日本で初めての研究であり、高く評価すべきもので、この時期のロシア文学の研究に際して今後、参照されてゆくべき重要な論文であると評価される。

よって、本論文が課程による博士(文学)の学位を授与するに十分値するものと判断し、ここに報告するものである。

公開審査会開催日	2009 年 6 月 13 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		井桁貞義
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	博士(文学)早稲田大学	大石雅彦
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		貝澤 哉
審査委員			
審査委員			